

圖解

量地指南後編

三

△ 1  
5275  
6





門 41  
號 5275  
卷 6

戸川  
藏書

量地指 南後篇卷之三

極傳解

勢南 處士 村井昌弘編述

夜中見町

夜中見町とは。夜陰小町見と量るれ法なり。一書に  
夜陰の目的とあるも。まゝ夜の見様とらふと。そも小  
同術なり

古傳よ云闇夜といふも。目的小火を用る時ハ白昼小異  
なるに。但渾発を以て量るが故小定規やりの器小割  
を併て常に遠く伐寸分小摸してまゝと用る也。且手本闇  
時ハ見込見返とも。知かこ。故小圖のごとく。線香又ま  
火繩等。あてを短く切て火をほけ。是を目的小とらひて

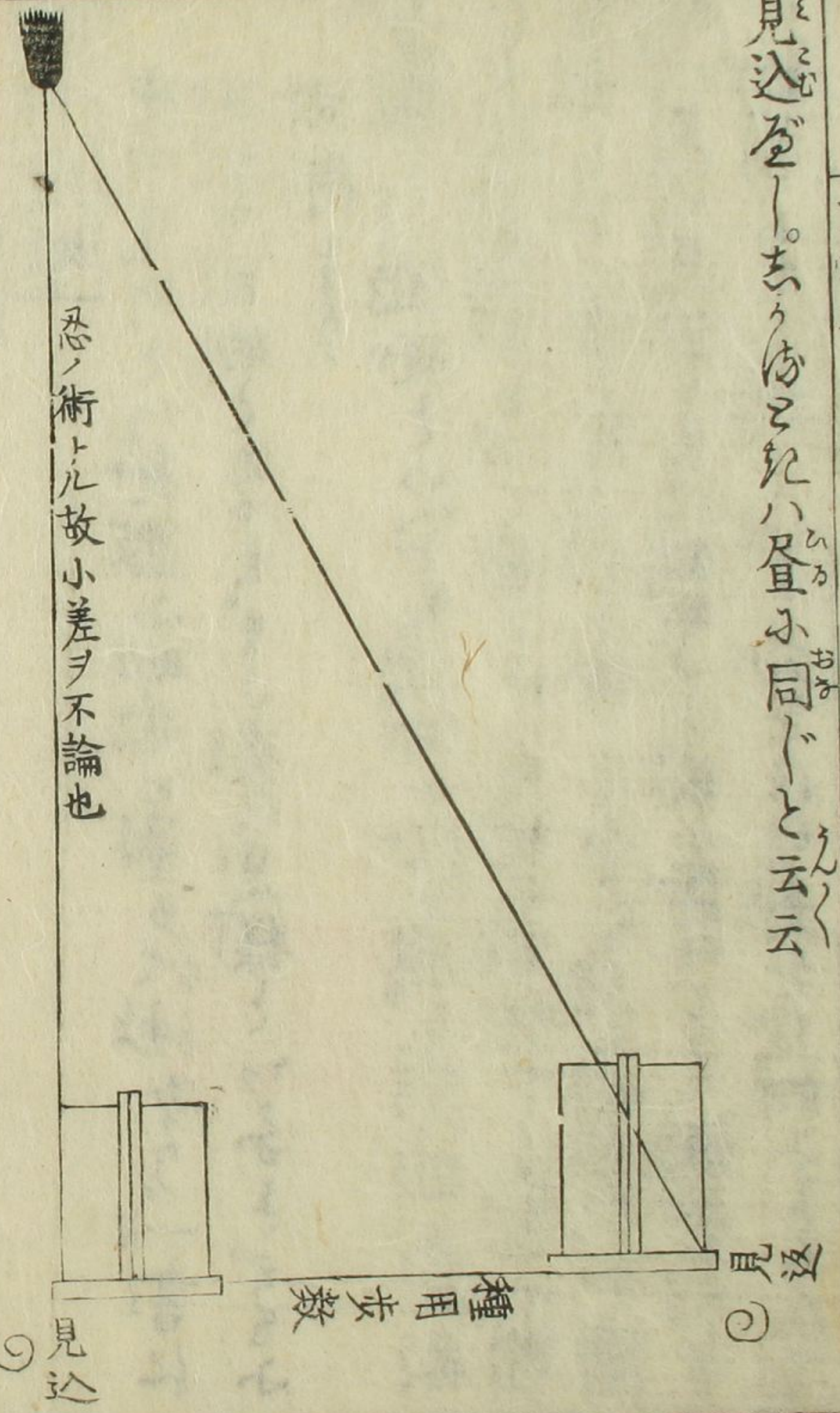
量地指南後篇卷之三

早稲田 大學 図書館  
第 27.6.4 文  
藏 書



見込を。去うゆと見ハ昼小同くと云云

量其持南後編卷二



又云右小火を用る時は見盤みても求め知る術あり。然る時は渾発を以て計ることも自由なり。或ハ十間開て一の割

に當ると見ハ遠さ十町なぐ。兼て試と知るなり。余ハ是と推て積るるを

船路之積

古傳曰海上を涉て曲節直径の船路を量知の術なり。是ハ船路の要といふも同術なり

術曰先陸地小於て湊口の両端の廣幅を求め。是を海上の種と見。扱船中より度数を仕掛置磁針を以て方位を極め。然して出船す。度数とハ線香土圭詠歌傳聲捨糸等。何あても里数を試するは品物をつらなり。勿論洋中あて変風あることハ捨糸なり。何れも其船の走の様を懇ふ改むる。昼夜右の如く。怠屈すべし。曲徑路一次よりの方位の町里を測る。嚴重なるべし。然る遠路の船路曲道

量其持南後編卷二



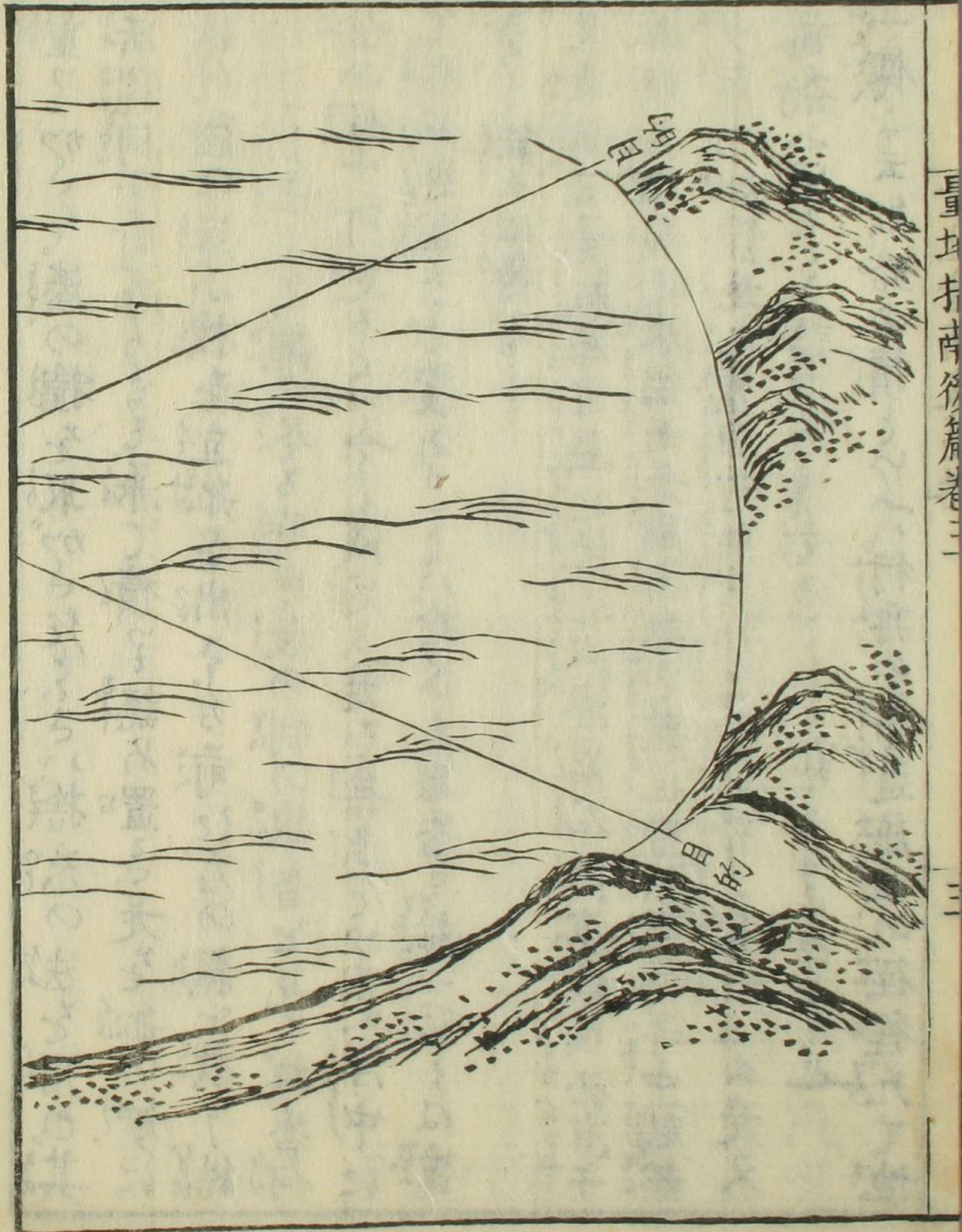
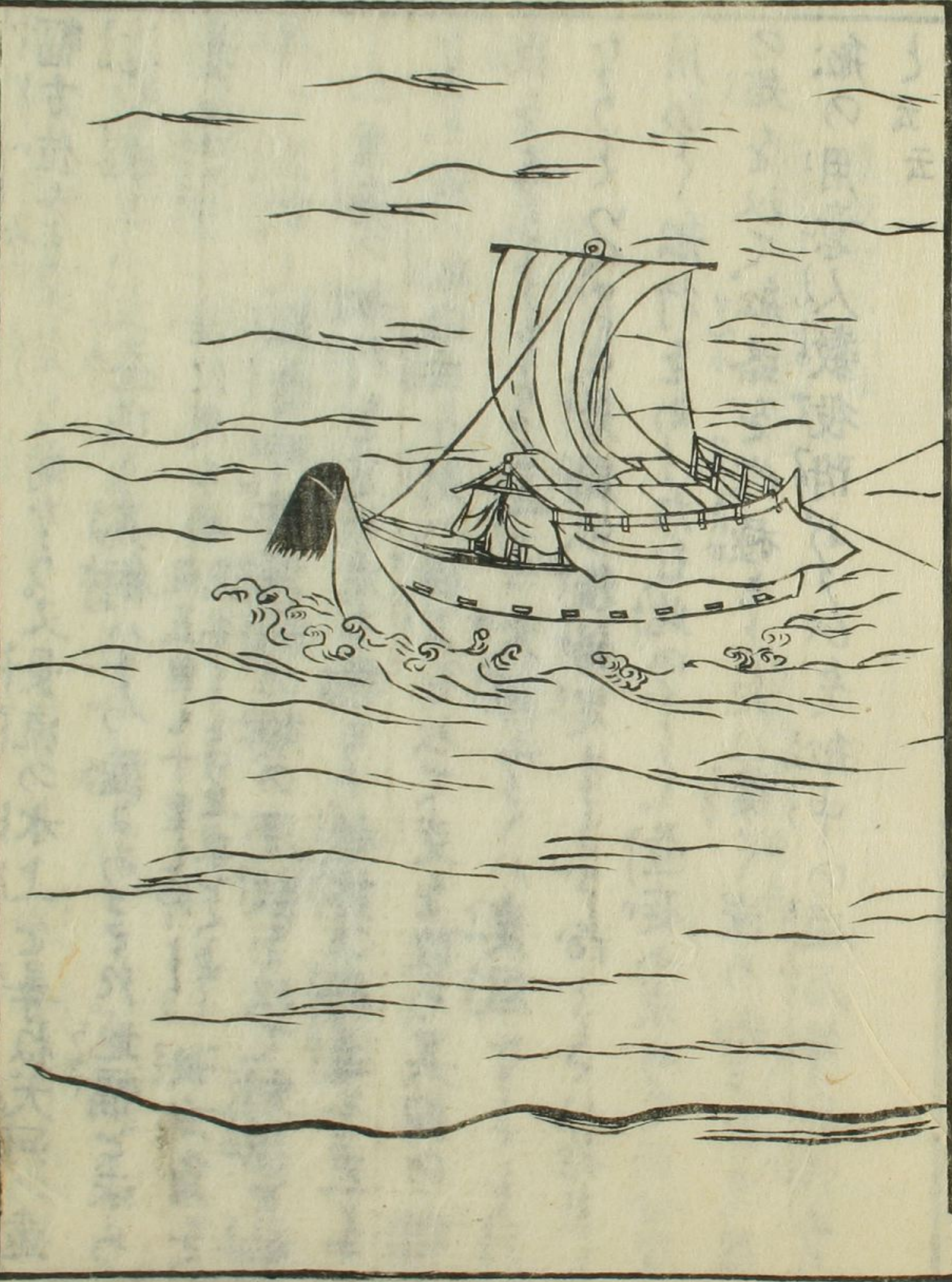
直路掌杖指がどくくなくんと云云

或傳曰湊より船出ざる以前近邊の山へ上り。湊まで町見を勤め。何十町と知り。其種の口を違ひして。扱長と二三尺許の竹を渾糞のどく拵へ湊の口は合せ。要と能く置。湊より船を漕出すに。舳ふ立。右の竹を以て。湊の口とする。竹の開口湊の口合の時。最前陸めて町見を求る所の道程と均く舟走ると知るべし。是を湊の種といふ。まづ度数の制。度数と何れをも以て。船の走り度知るべし。圖のどく。竹筒を拵へ寸分を盛付け。内小線香と立置。右に湊の種をとりて量る。何十町ふ何分燃しとて。是とえらして。一分小何町走ると。一寸小何里走ると定置。線香の寸分を以て。海上の道程を知る。是火刻といふ。又湊まで町見

量るがどく。湊の種を取がたると。捨糸の法を用ひ。其法繩何十町なりとも。兼て積り認め置。是を船の舳に拵。陸の岸小杖を立。船を出さる前に。右の繩と杖と結。付置出船して。繩の尽る時。度数の制の線香を見て。線香何分小何十町走るといふ。或定る。是を捨糸といふ。又洋中にて。順風逆風をど変ある。捨糸も線香も始の試とは違ふ。能々心得を

又或傳云。量船路有益之地。名曰湊。岩石押滄波。而必有干。而端其兩端之求幅。而是用出船之種也。得順風而洋中趨。船少無止。如陸地也。蓋曲折而求知之。乃船路之術也。云云。是又前条小同。語たり。漢文のどく。記するまでのこと也。一傳云。船路の積といふ。行舟の常道。屈曲の徑程。凡て地







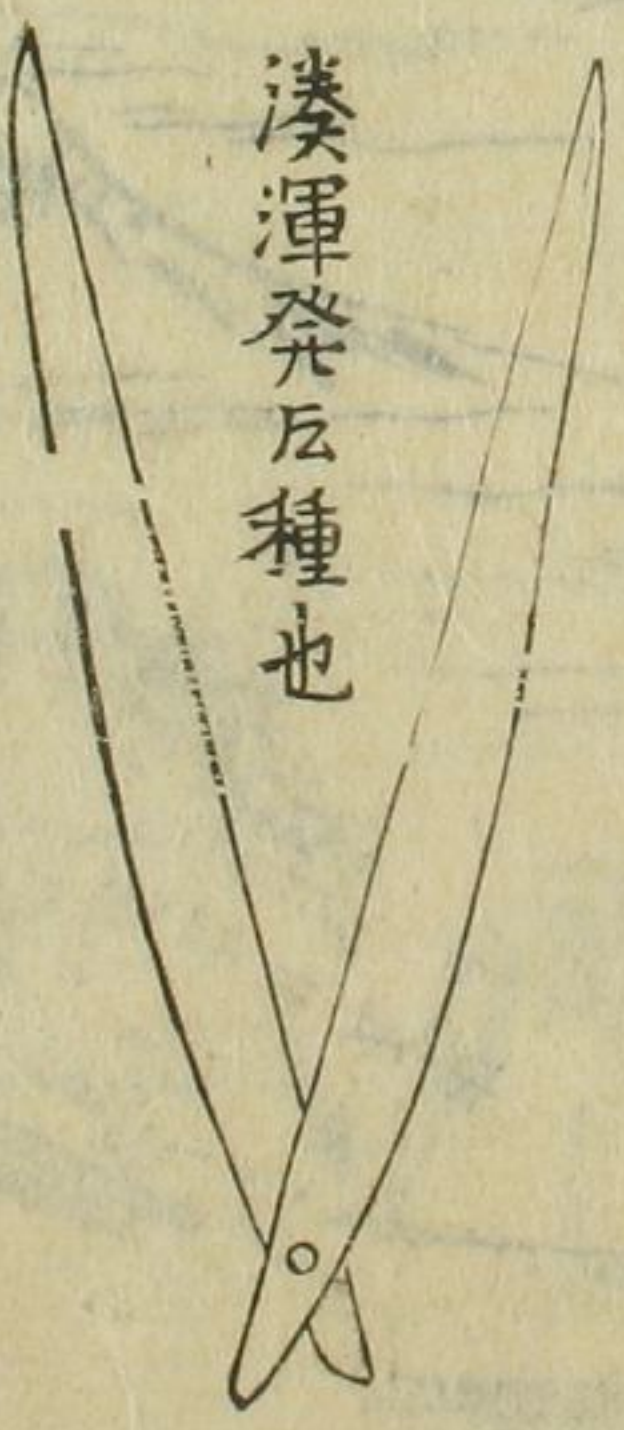
幅方位を具小考る術なり。又長流の水上を尋ね大河の遠近を求るふ大益有り。其術はまづ陸にあり。地幅と求め是を繫出の種に用る也。但五里も十里も沖より扱方角を得て出船し。線香時計漏刻の類の度数を以て刻限と紀し。一里毎の船行を定め是を種とし。始終の行道を求るなり。或ハ船の曲る則ハ磁石を以て支を改め其間の刻限を求るすなり。とて大難やハ変風なるとも。此なりとて。若風の強弱定まらざれば。捨糸を用ひし船行をわらむ。此の如く。昼夜も求めて而分度の矩を以て船路を作極るとは。委く求め知るなり。但船の用意人数役附あり。船中の磁石等秘傳ありと云

積遠里

積遠里といふも遠里の法といふも同術なり。此術ハ国の圖小用るこ多し。或ハ十里を求る時の間ハ九十



度数制火刻法



湊渾発石種也

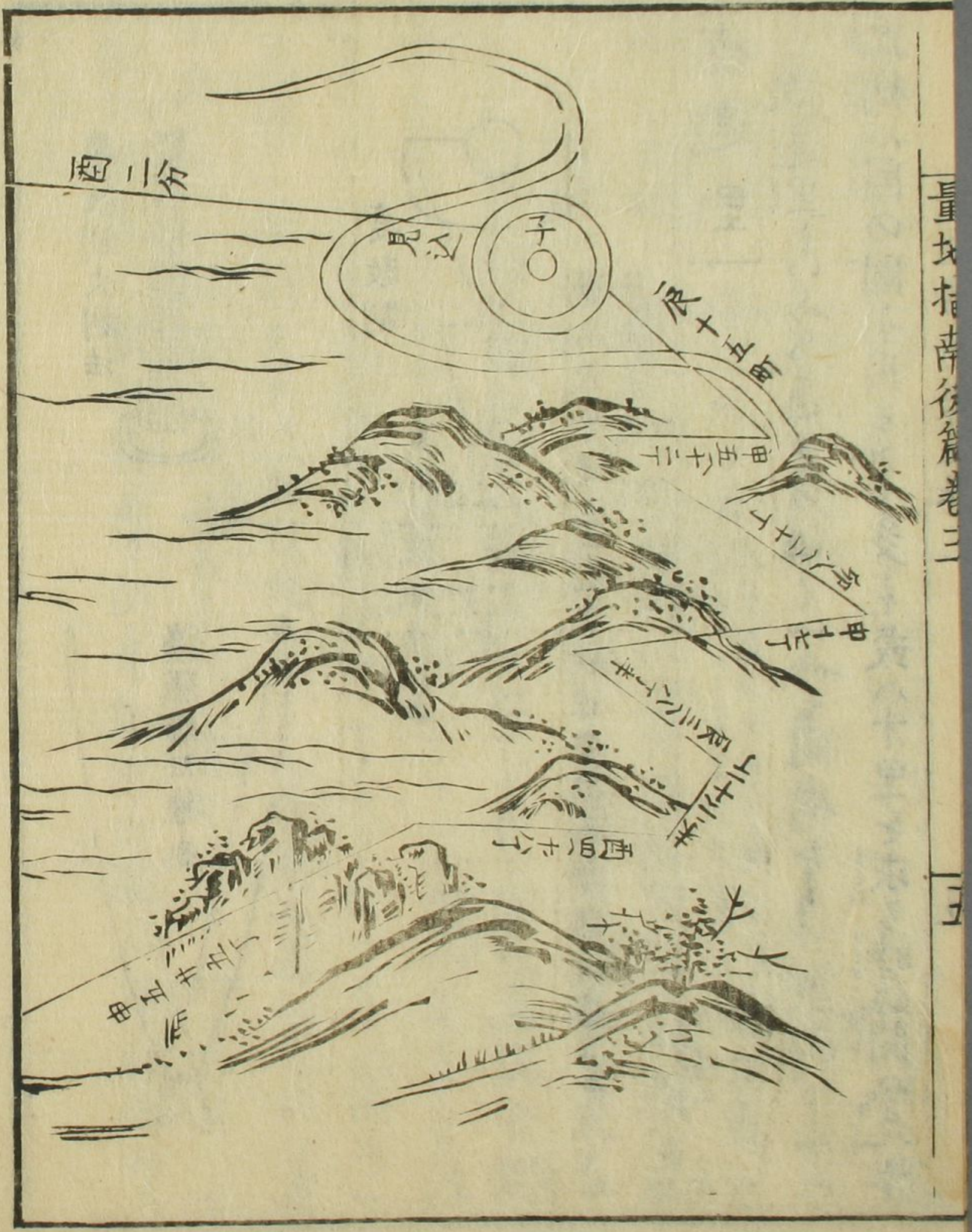
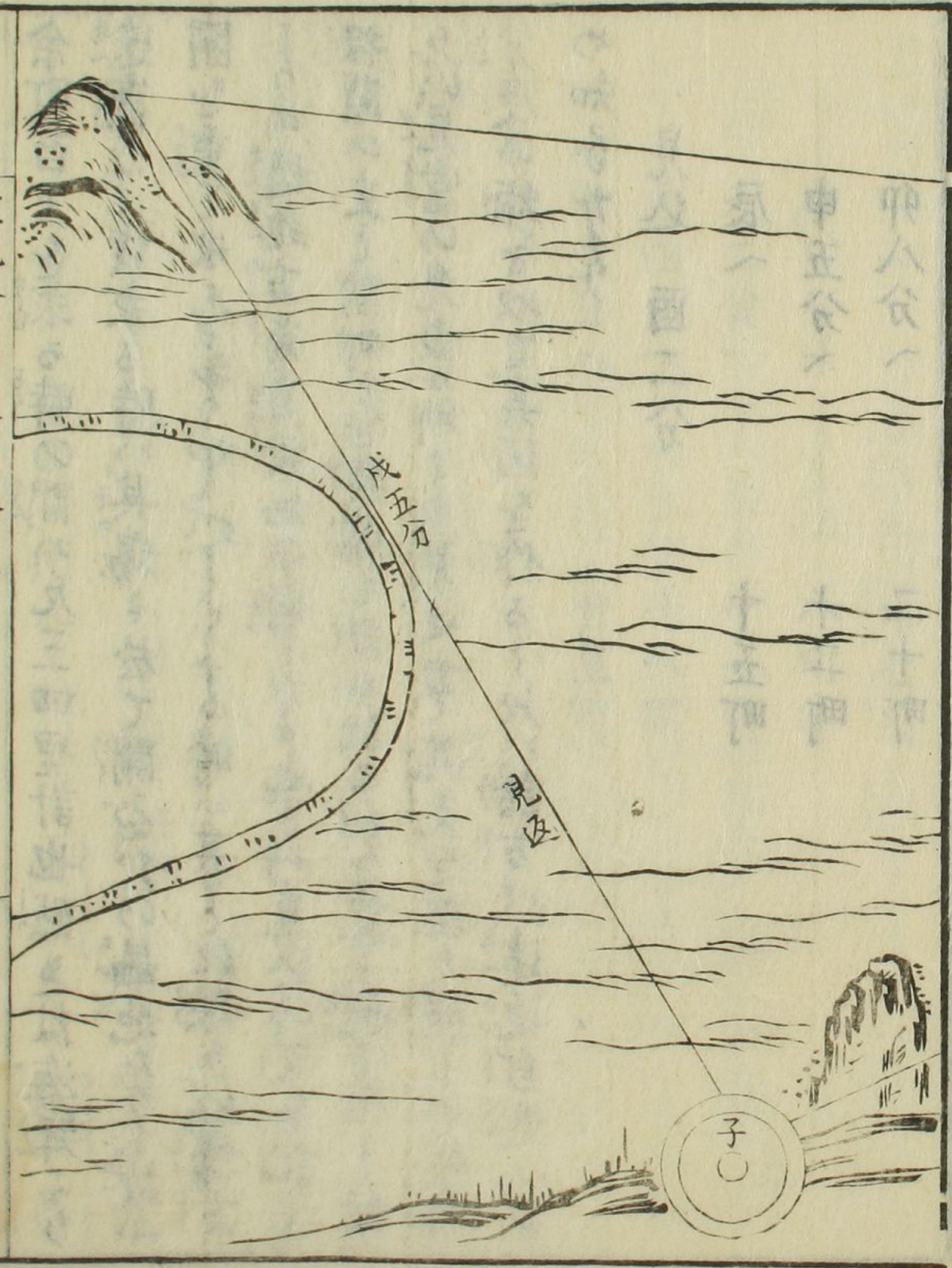


度数制

天風法或風席也云

或云此船中度数旧制也。依無益今無此器云。予未見之。







余町百里を求る時の間ハ九三四里計也然もは海岸より  
 遠駕なれ伐求る時ハ其場子於て開る所の畠地なり故  
 開を重て求るありかればくする時ハ其所に限る諸方  
 りの遠近方角自未知の術となる也まづ見込の支を記し  
 叔開の支と間町とを幾開も段々に心を書き何の所り限  
 らば見當の見申の所より見返めて其支を記し然してのら  
 分度の矩を以て其図を作るとれば諸方れ遠近自然未  
 め知るなり

- 見込 酉二分
- 辰へ 十五町
- 申五分へ 十二町
- 卯八分へ 二十町

申へ 十七町  
 辰三分へ 八町半  
 未二分へ 十一町  
 酉四分へ 十八町  
 申五分へ 廿五町  
 見込 戌五分

遠里矩とのふものり。国図の要法とて遠目的のとれ條會  
 慥なるるこれハ此術を用ひ目的の見込至て遠さるれば  
 線會決うづらるる間多と者なり此術を以 勤る時ハ數  
 百里といふも未も差るるなり。図のくく條線の會快  
 ぶる時ハ針をさし糸を付て元の墨に隨て両方へ引合せ糸  
 のく合て會なるまで何尺も引べし定規をさし隨て墨



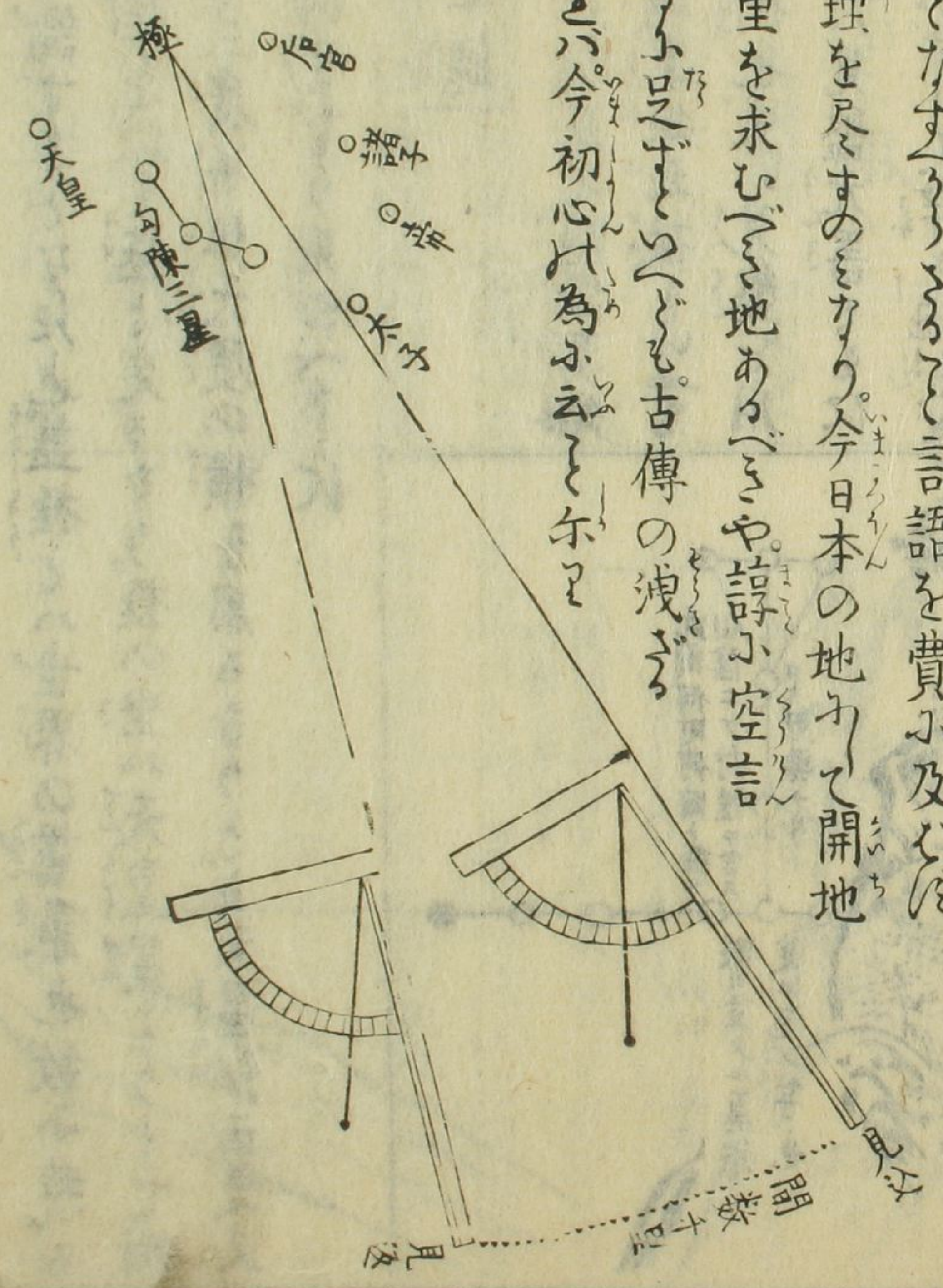
と引てハ毛髮の差あるなり

試北極

古傳云天の高さを量る術なり。北極の積といふも同術也。量天尺を以て北辰を見込て下系の當る所を記し數千里と趨す。又北辰を見込といふ。必下系の當る所を差出來す。其差の口を數千里小用ひて下系の全長を計るといふ。天の高さを知らるなり。平町を上下に用る理なり。其術明なり。叶いとも小里に於てハ求めたる所の理なり。謂ハ分数なり。叶いとも小因てありといふ云

昌弘日町見の數書名此術を載て洩すといは空理あり

定測とカすづうと云ふ。言語を費小及ぶ。唯其理を尽すのめかり。今日本の地ありて開地數千里を求むる地あるべしや。諄小空言論すといふ是づといふも古傳の洩る所なり。今初心け為ふ云といふ

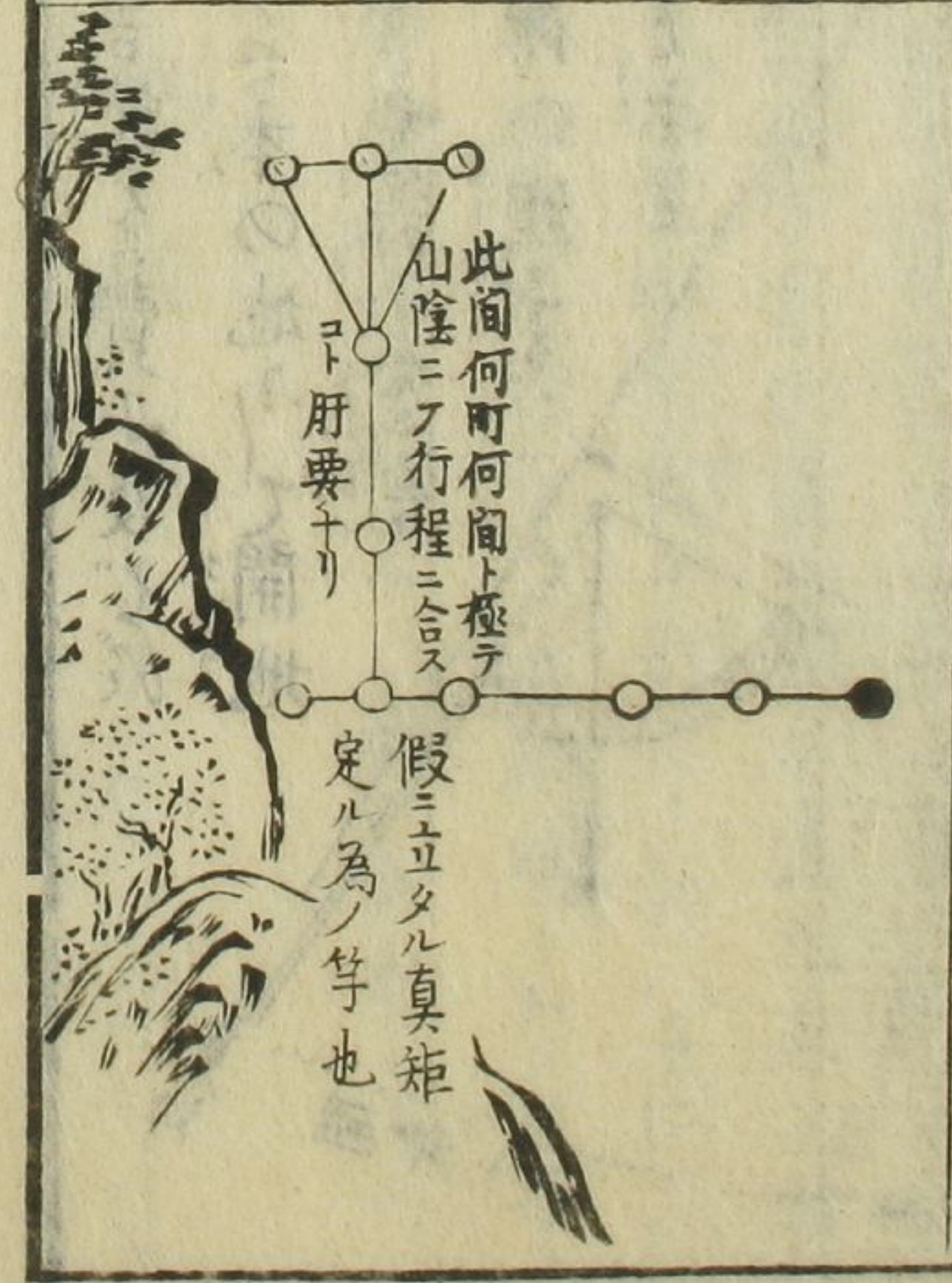




舊傳云天の高とハ極の坐まをいふことなり。無星の天ハ天文も論ずることなれ也。蓋極ハ世界の貫氣也。故に繞る所八星を以て極と定るなり。極の坐ハ天皇星よりして相忖。三度半。但天度の積を用るなりと云云。昌弘云是又無誓の言なり用ゆべし

真矩繩

真之繩。真之繩張真矩之繩。真矩之技と云も同術也。或ハ見盤と用ひ又ハ見盤元器ともて用ひずして竿と磁針と



以て量るるも何なり。俱

小其理ハ同ト

此術ハ屈曲する道路と

直小作也。或ハ町屋割

屋敷割ふ用也。又ハ田

地の用水を取ふ高山と

穿ち山陰の水引る

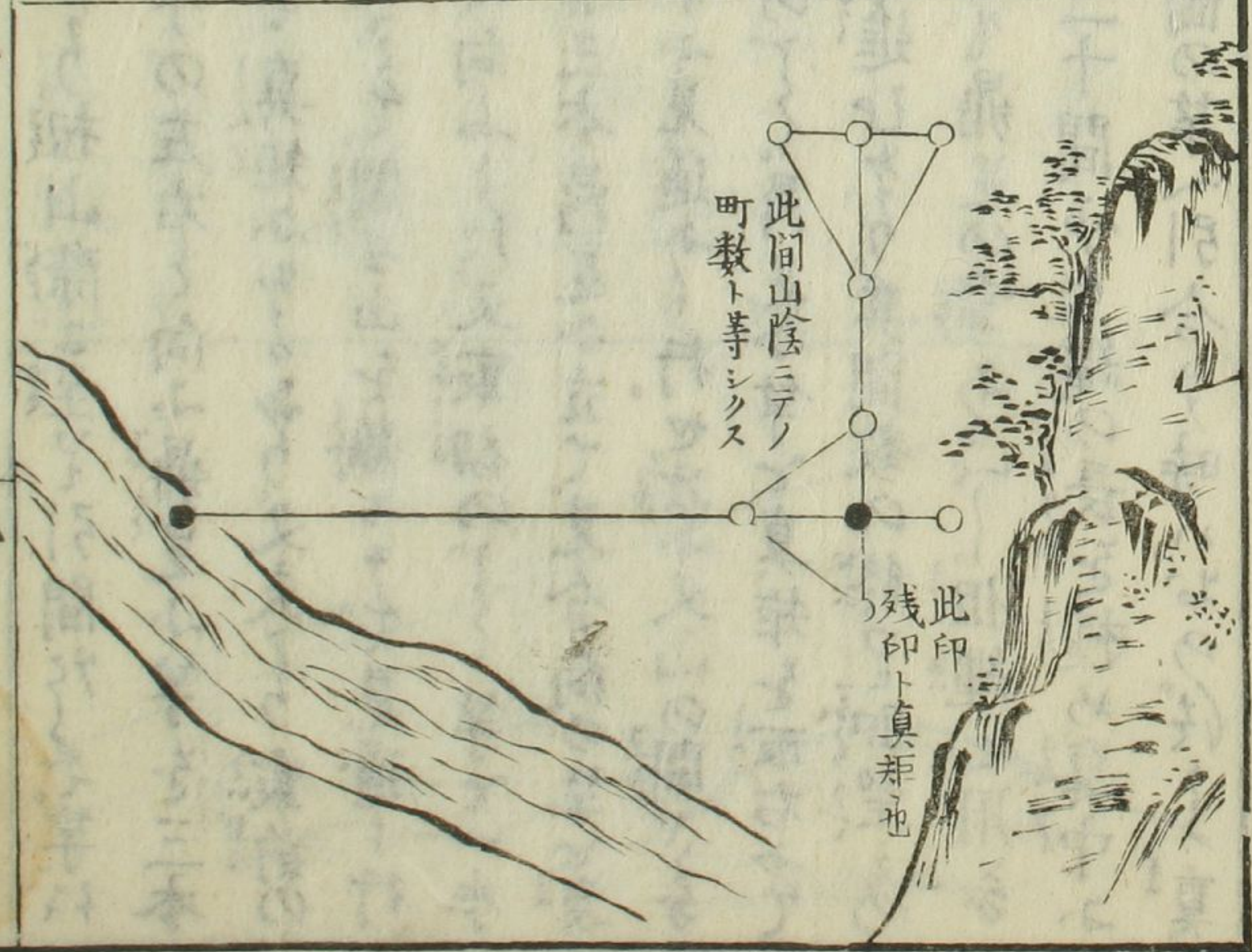
ところ。かやの類ふ第

一と云ふなり

術曰望の場所小竿とて

色竹やても立をいより直

矩小竿二本を以て段々小

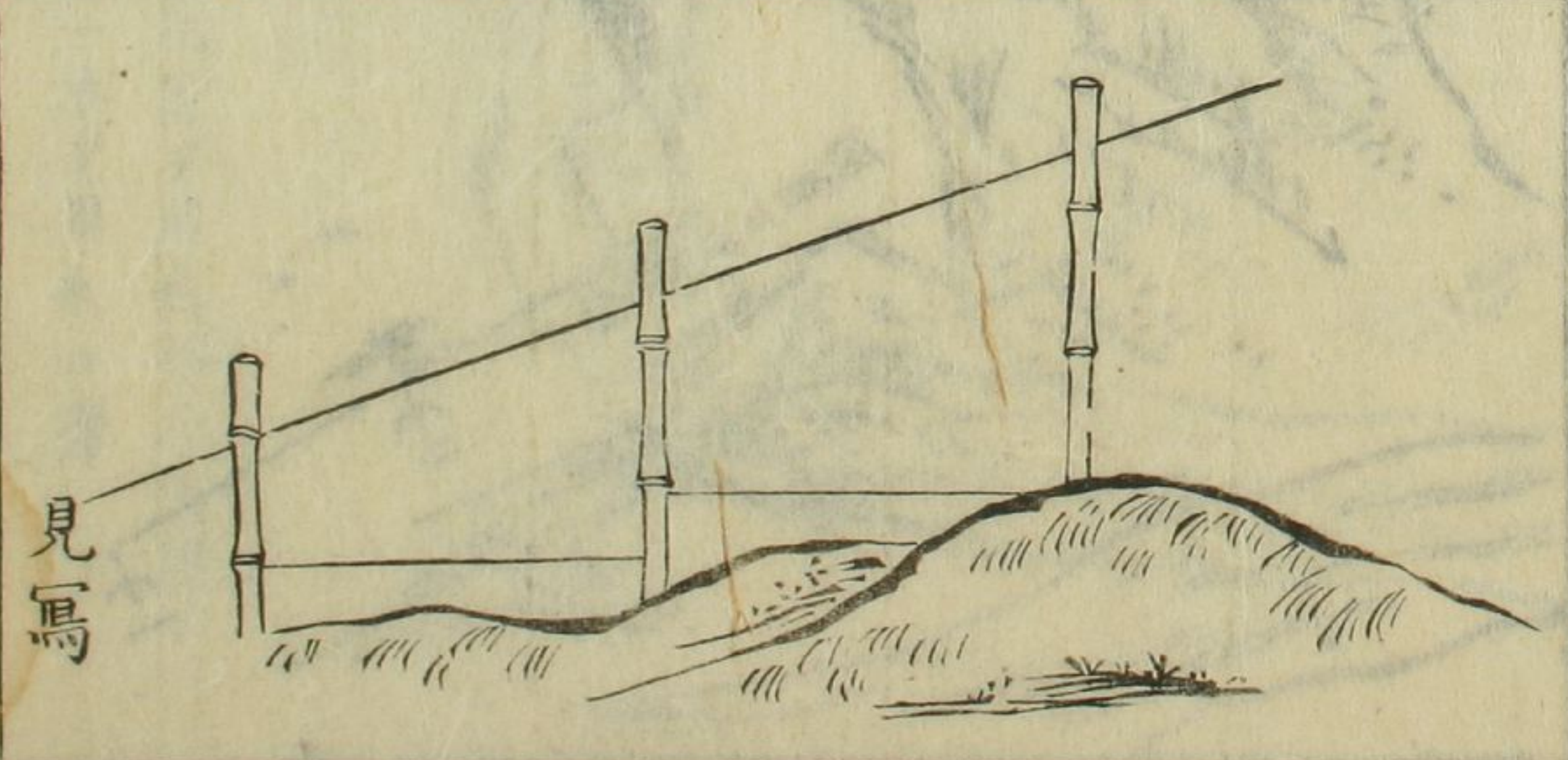




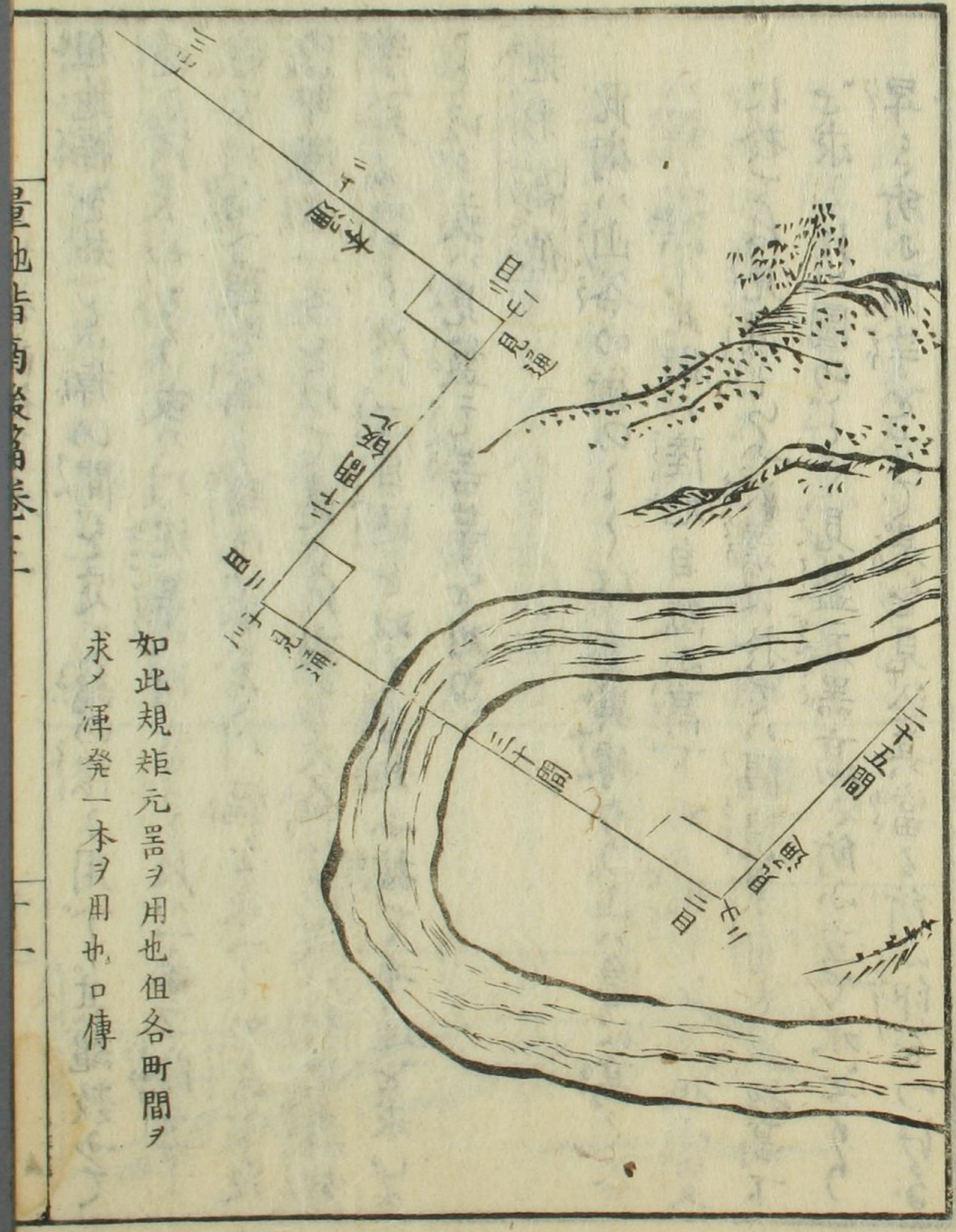
立替々々先へ見通し行なり。扱山際に至り引間たり。竿は一本立て残す印なり。其竿の左右と向ふ。鼎足小竿を二本立て見合す。向の竿も真矩ふちあり。又夫より最前の段々小竿と立替送つて。開る山を離るまで見通し行なり。扱開る山を離て横へ向ふなり。又最初の段々。竿と一本残り。其竿の左右向へ竿と二本鼎足小立て。見合向の竿と真矩ふちりて段々初の段々小見通し行せ。次小又山の開る所に至て目的の方へ最初の段々。鼎足小竿と真矩を取。右へ山陰を勤る程間敷を進むなり。其間敷の終り即望の場所と真矩なり。此所も鼎足の業あるべし。但繩を用ふし。肝要なり。十間も二十間少と。繩の長を極め真中へ印を付て。先の竿へ打掛面の竿へ引合す時はおのほり真

矩ふちるなり

又曰此術ハ此方より遠く見へる目的まで一文字の通を差すて求む術なり。或ハ直道等と求むれば此術を用るなり。古傳ハ一棹二本とて求む行といへも。若目的を見隠す時。道と失ふ故小。これを改む。一棹三本とて求む行なり。圖の如く望所小。棹一本と立。目的を寫して。又二本と立。而後ハ目的を用る。及ばず。蹟の一本を先へ送て段々小立替々々行なすあり。即一文字の通を極る也。







如此規矩元器ヲ用也但各所間ヲ  
求ノ渾癸一本ヲ用也口傳

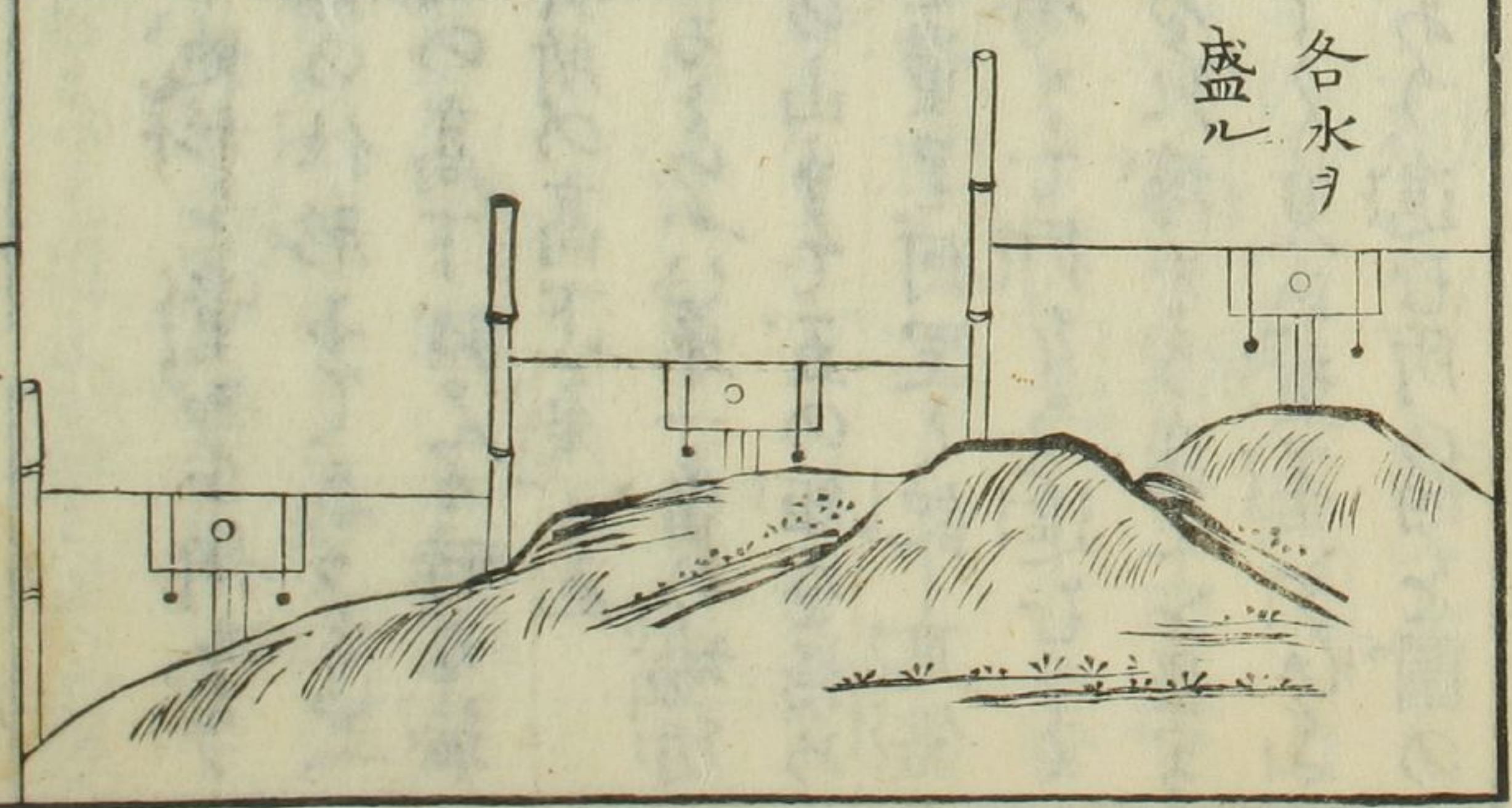


但地幅を知こ、棹の間を定て繩の限り用べし。其繩數少て遠きは求知なり。或ハ川泥等へ行當るれば一本づ段々越て川向へ通を寫し。跡の一本を以て川幅を求べし。或ハ節渾筈一本を以て遠きは求て大益有り。或ハ村里森林等へ行當るれば二目返を以て直矩小按て本通を求り。或ハ見盤元器等を用也。

地形高低

此術ハ山谷の術のごとくにして異傳あり。山ハ急に高く谷ハ斜小深し。此術ハ陸地自然小高下有る地形とす。但小変に於ては見渡すも大業に於てハ隔境累重し。叔高下と求れば圖のごとく見盤元器高き所小立て。水とより早き所小間等と立て。是を見込其當る所小印をつけ。

これハ高下の差あるあり。或は段々小送つて差とある時ハ始終の高下各あり。或ハ類書の術目小地形高下小事見渡累隔累倍々あり。同術也。傳曰小変見渡すもハ用水田畑の高下。又ハ屋敷等乃高下。輕き業也。然ながら若干の大業も勉む。其法盤を豎けて平直を極め。盤の上端小定規を置見當りて高下は量る。所へ棹を立て見渡す。其盤尺と棹小印を付て。其印の上と下りめて





其地の高下とあるなり

又曰隔境累重と云ふ隣國の高下地形を量知る術なり  
尤大業なり故小盤小水と盛る体の仕形ありてあると  
とも假令ハ江府より常列総州の高下はなる時を築  
波山を目的にて山の高下は其所の高下と考る也

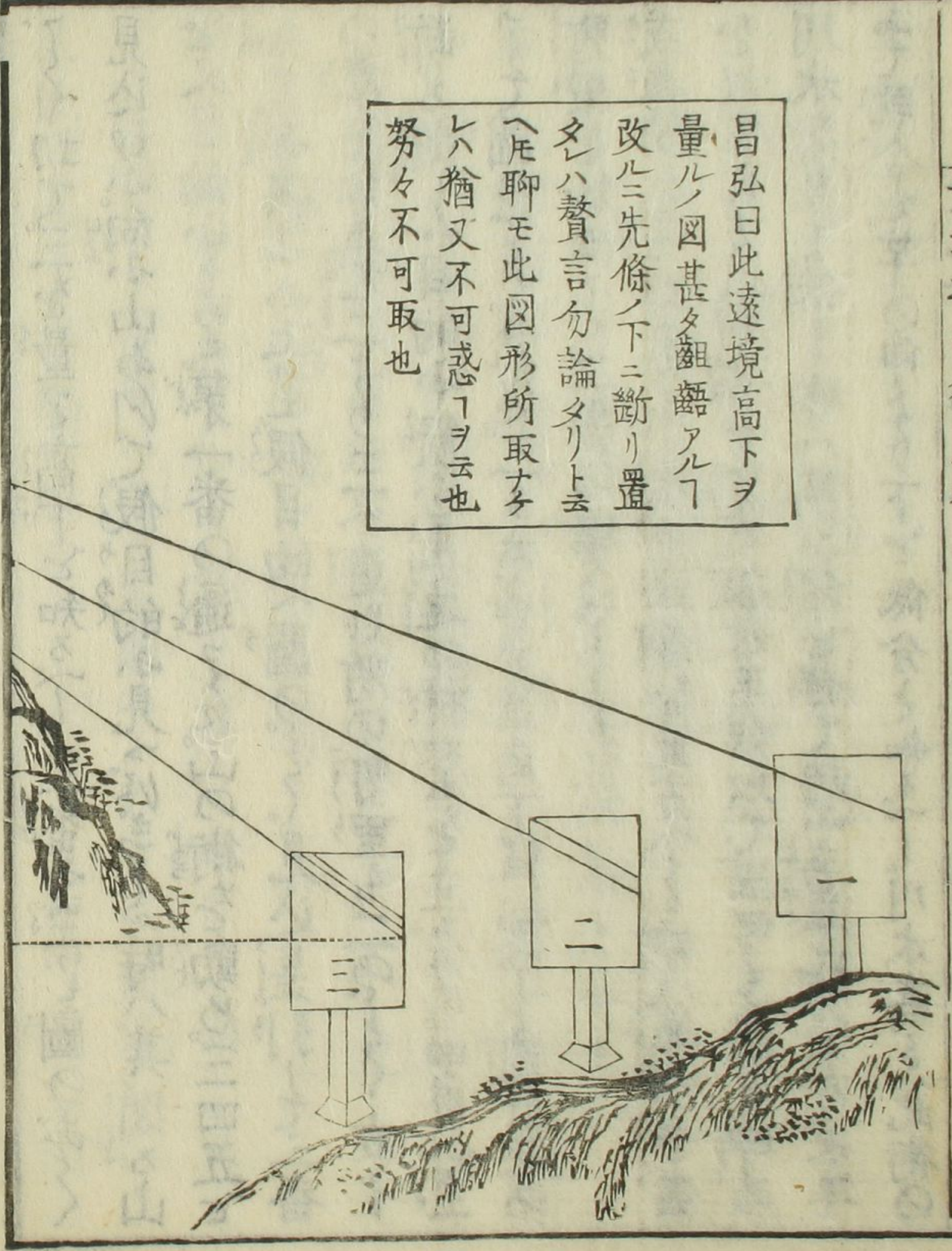
右よ所謂隣國の高下地形を計ると云ふ第一番の場所  
ありて向上の平町を勉め假目當の山まで五の矩を極め  
山の術を勤め三の矩を極め四を量る何里と記し見盤  
小悉く盛つけ次の盤を立たる場所まで行なり進むこと  
何里と町里と打て知る盤を立たる場所なり高下と量る  
るは地なり二番に至る又圖のごく見込盤墨といふ  
其地の高下又目的の遠近ありて差あり進む所の四を圖の

ごとく切て三を量る高下と知るべし二番小至りも圖のごく  
見込む向ふ山ありて假目的見へば進む時ハ其開る山  
と又目的小と第一番の通る山の術を勤め三四五と  
知て扱其山小上り假目的へ圖のごく見込差引して三番  
の地を知る尤二より二へ進む所の町里も二のごく右  
断る開る目的小假小見通の材磨を立るなり四番小至  
りて圖のごく見込三よ云のごく高下は知る進む處の  
町里を知るなり二番の場のごく

或傳ふ云遠所より川水池水を此方へる時ハ先水平器  
を以て此方ハ地安を定め扱水平弦以て五町も十町も印の  
川水を見て低る時ハ竿小印と付て川小立置此方より水平  
を眺合せ竿の印より下と低分と知るべし川水高とハ此術の

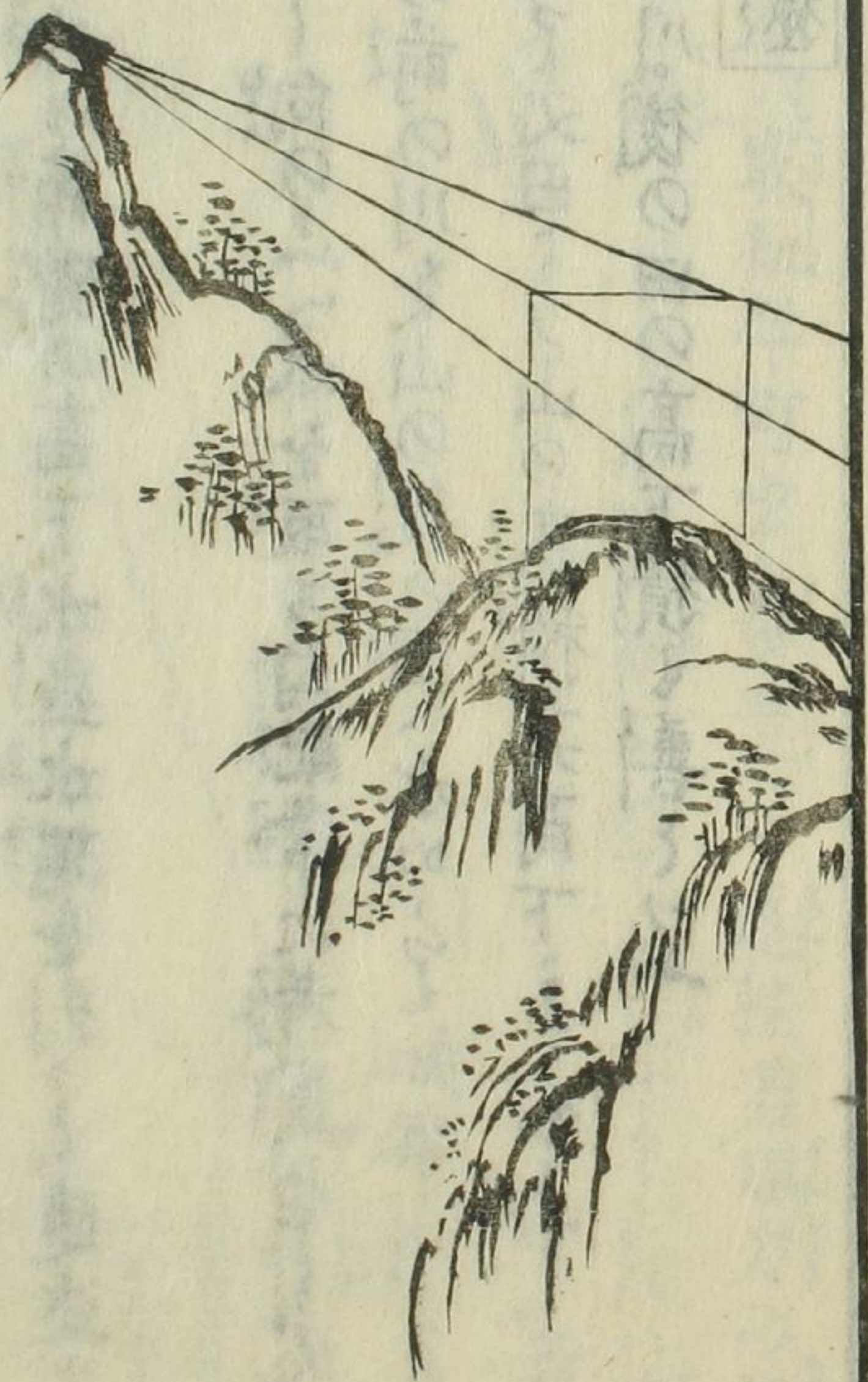


昌弘曰此遠境高下ヲ  
量ルノ図甚々齟齬アル  
改ルニ先條ノ下ニ斷リ置  
タレハ贅言勿論タリト云  
ヘ凡聊モ此図形所取ナ  
レハ猶又不可惑一ヲ云也  
努々不可取也



還源を用い。水平と五六尺も高く臺を上げ。夫より川水  
と見るるを

又云彼方と此方と同直の地あり。水上と水落と同尺あり。水  
樋の水よりどくく。に上より押うけ水ある理なり。も勾配ぬ  
るは洪水のとれ悪し。水の流も程あり。其所の高さふかく



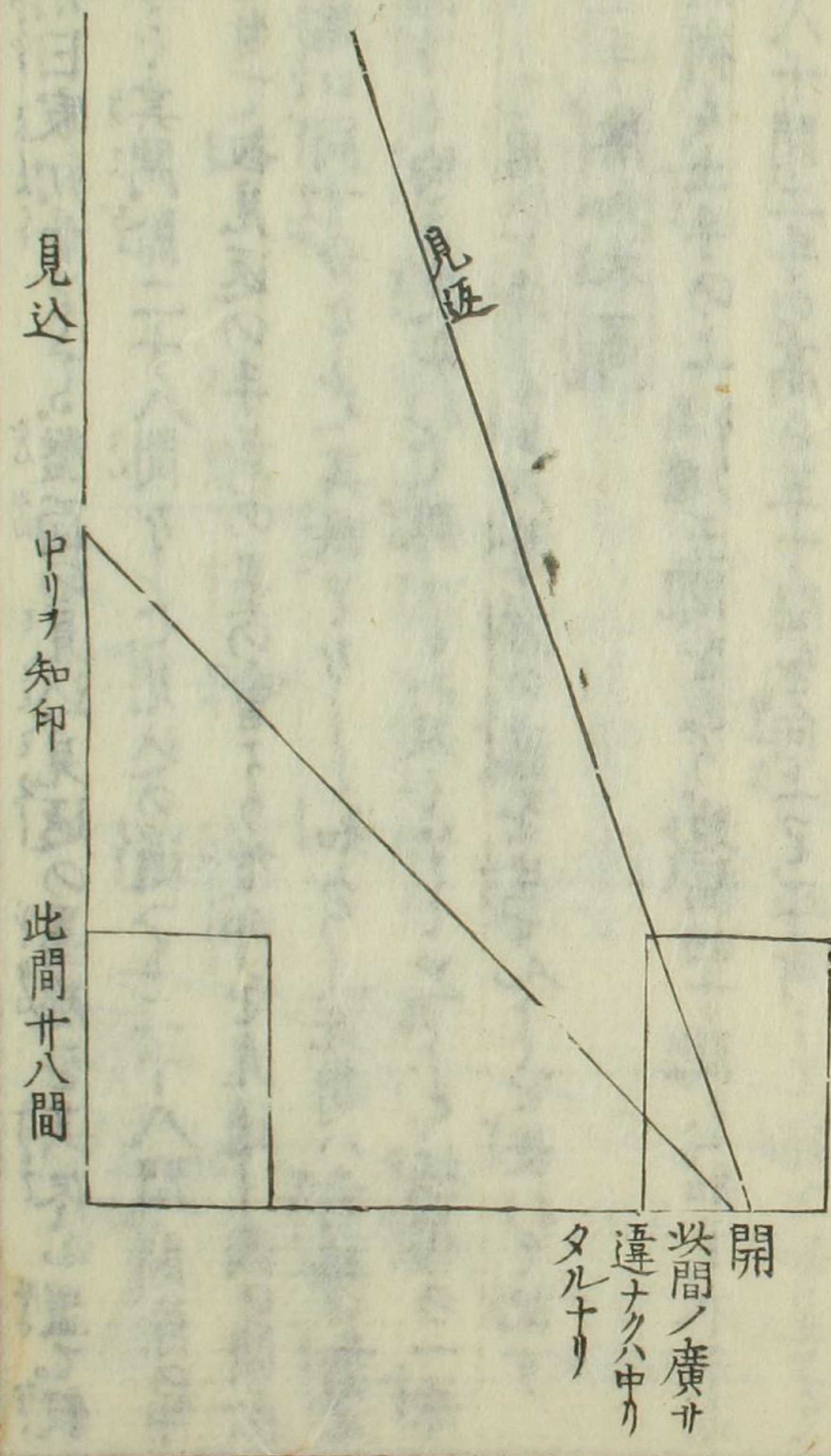


らびハ用ふ立ず。右十町も先<sup>さき</sup>めて目的見定め<sup>めあて</sup>むぐくハ五町目と六町目に印<sup>しるし</sup>の材<sup>ざい</sup>を立夫<sup>たてうそ</sup>と見通し。又五町目より向と見通し。遣違<sup>ちがひ</sup>へ間と打心<sup>うちこころ</sup>として中次の理<sup>ことわり</sup>なり。又十町先<sup>さき</sup>めて横<sup>よこ</sup>へなりとも斜<sup>かた</sup>ふかりとも折曲<sup>まげまが</sup>又十町も先の勾配<sup>こうはい</sup>と見時<sup>みとき</sup>ハ曲途<sup>まがと</sup>として三角<sup>さんかく</sup>の矩<sup>かね</sup>と耽合<sup>とんごう</sup>せ。其後<sup>そのち</sup>右のぐくに見通し。高下と知る。或ハ家作<sup>やがく</sup>の節礎<sup>せうそ</sup>の高下。水盛<sup>みづも</sup>水繩<sup>みづな</sup>を引く。遠近<sup>とんじん</sup>ともに同理<sup>どうり</sup>なり。

又云谷<sup>や</sup>を廻<sup>まわ</sup>り向<sup>むか</sup>の山へ水<sup>みづ</sup>を取<sup>と</sup>る勾配<sup>こうはい</sup>常に考置<sup>かんざ</sup>を。又山とほりぬき。山の前<sup>まへ</sup>の川<sup>がわ</sup>を。山の後<sup>のち</sup>の田<sup>いり</sup>へ水<sup>みづ</sup>のくを知事<sup>しるし</sup>。川より山の高下<sup>こうか</sup>を積<sup>つ</sup>り。又田より山の高下<sup>こうか</sup>を積<sup>つ</sup>り。其高下<sup>こうか</sup>として知るべし。或ハ山の上<sup>うへ</sup>より。前の川<sup>がわ</sup>。後の田<sup>いり</sup>の高下<sup>こうか</sup>を積<sup>つ</sup>り。善<sup>よ</sup>といふ。

中不中片極

此術<sup>このじゆつ</sup>ハ假令<sup>かじやう</sup>バ。最初<sup>さいしゆ</sup>平町<sup>へいぢやう</sup>として量置<sup>りやうぢ</sup>する。遠程<sup>えんぢやう</sup>若<sup>し</sup>眼力<sup>がんりき</sup>の誤<sup>あやま</sup>りなごあるくと疑<sup>うたが</sup>ひ。と見<sup>み</sup>ふ。此術<sup>このじゆつ</sup>を以<sup>もつ</sup>て改正<sup>かうせい</sup>する。見<sup>み</sup>ハ中否<sup>ちゆうひ</sup>立所<sup>たちどころ</sup>かわり。と



量地指針卷之二

一四

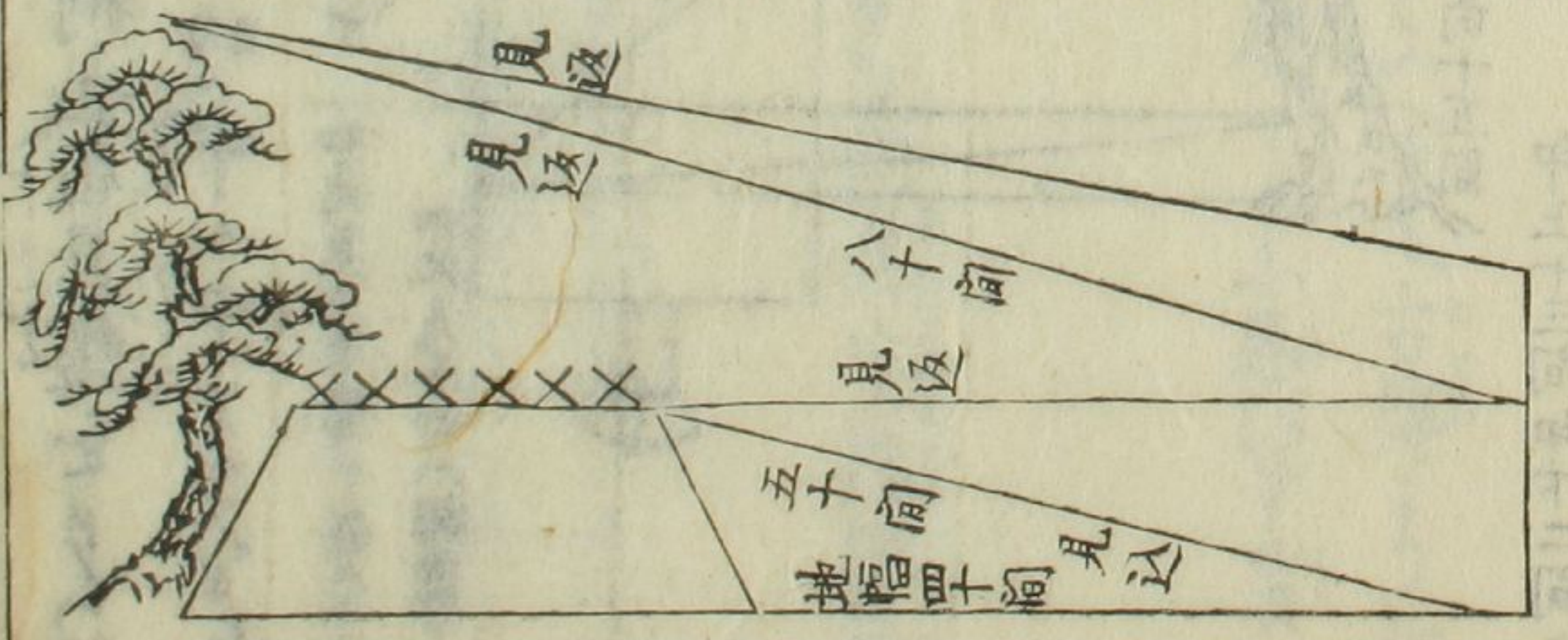
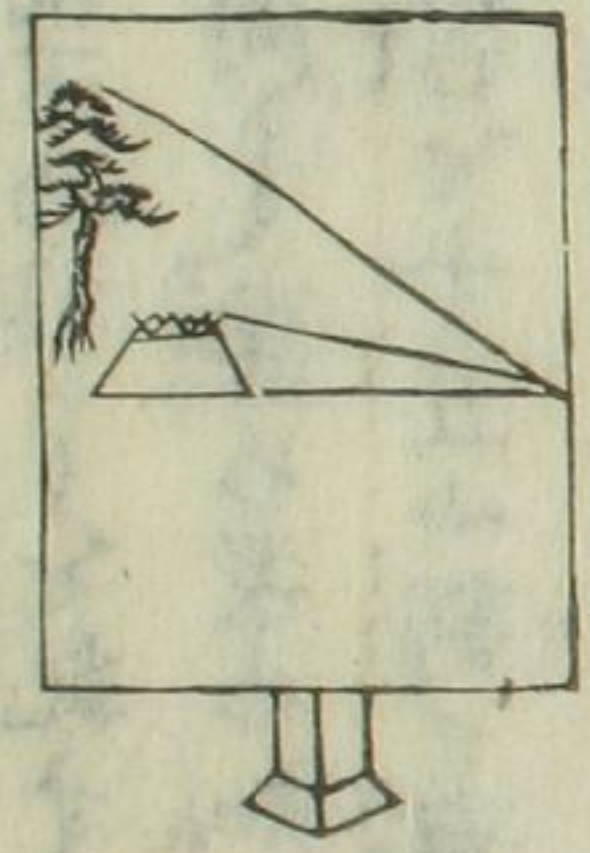


術曰寂初量する。盤面の見込見返の墨線を其俵に置いて假令を其開除二十八間をた見込の通つも二十八間。開除の印と付て扱見返の手前の墨の會より彼印を見通し。而の開除の縮口同寸分なり。其誤りなきこと知る。此術ハ前編の知雙開方と均さ夏あはれ。辨ずる及むずこと。極傳の一條として用ひがゆへに。學者の惑を生ぜんことを畏れて記す

土手陰知木高

此術を土手の上馬踏五間をた。地幅四十間を知り。木の高さ八十間。土手の高さ五十間を向上。平町をて矩を知り。て盤を整めて。木の高さ。土手の高さ。見込。墨と。各矩やど計り。其盤ふ土手の形を。右の分見。木の高さを知る。尤土手の兩垂斜同。やふ。し。時ハ知。也

又云此術ハ土手の前後同。勾倍なる時。小求る理。先土手の根。て。遠程を知。扱同所より。向上の平町を以て。木乃揃。て。空の規と求め。同く土手の上角まで。空の規を求て。土手の馬踏の廣さと知り。扱右の所。小盤を堅。居。水。浅。盛。要。と。用ひ見込。て。各墨線を引。分間を。一。刺。盤を用ひて。形と極る也。古傳の俵。記。也





**指高何分** 此術ハ高下の誤りとを糺す術也但見盤をりら

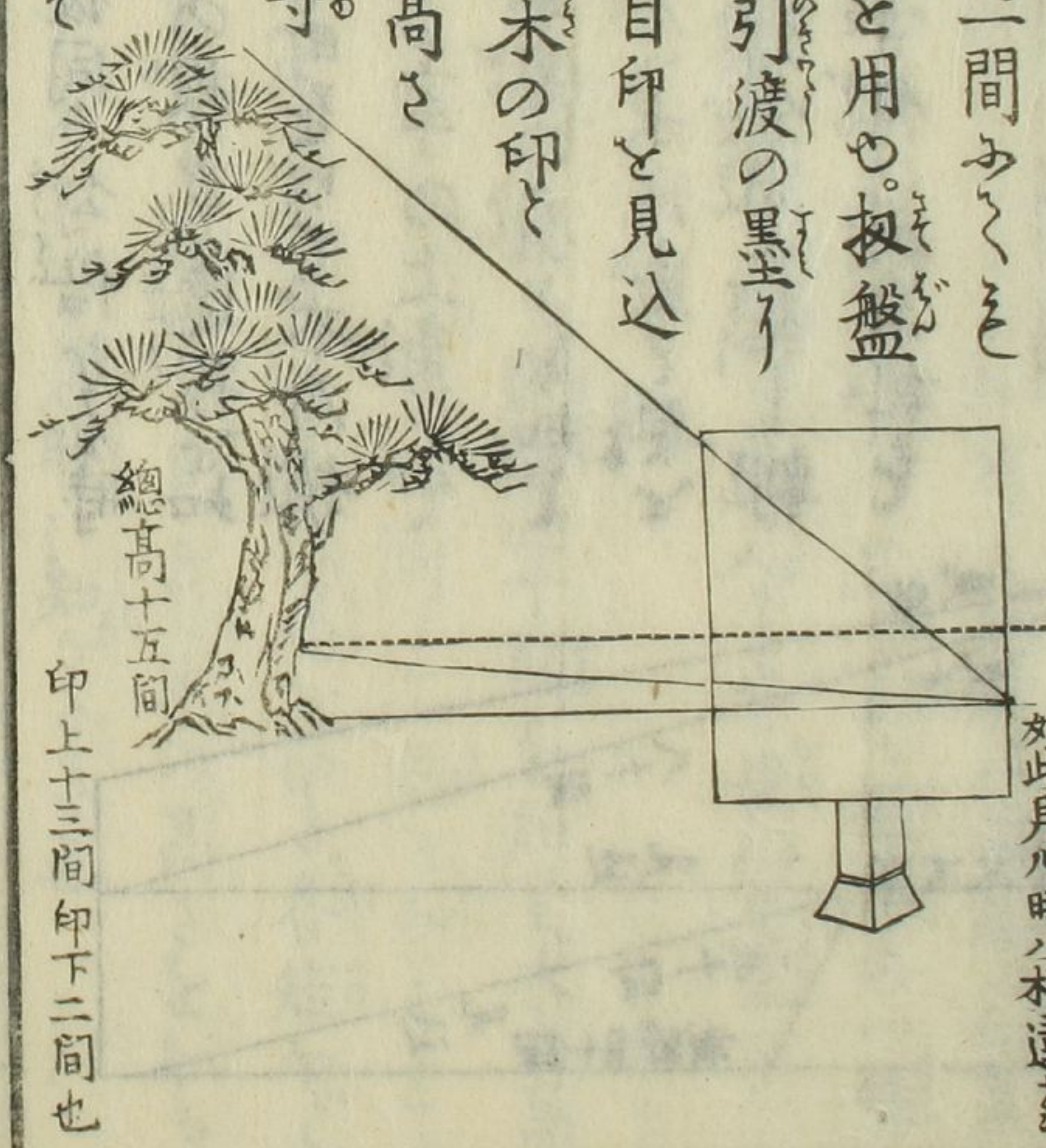
假令バ木の高さ十五間とも豫め求め知り時中々中々を糺  
さへしとせし先其盤面の口と十五ふ割て墨と  
引渡し扱其木の根より一間あつても

二間あつても立木小目印と用の扱盤  
と立て水とをり。盤面の引渡の墨と  
定木と當木小つけとも目印と見込

ぶ。其盤面の墨と立木の印と  
的當するは即木の高さ  
相違なりと知べ。或ハ天守

櫓の重々と糺し又三分一  
五分一等是と指す。おほく

鉄炮勾倍等用捨りり



此術見盤術渾矣術とも小。往々記す所といへども古傳より新

傳小至つ。皆是を奥儀の巻小載故小廢す。不忍びず爰に  
出す。見者贅言を罵る。あつたなり

**向指真矩**

向指真矩といへども。向正中と指とあつても。向真中。從陰指  
とあつても同術なりと

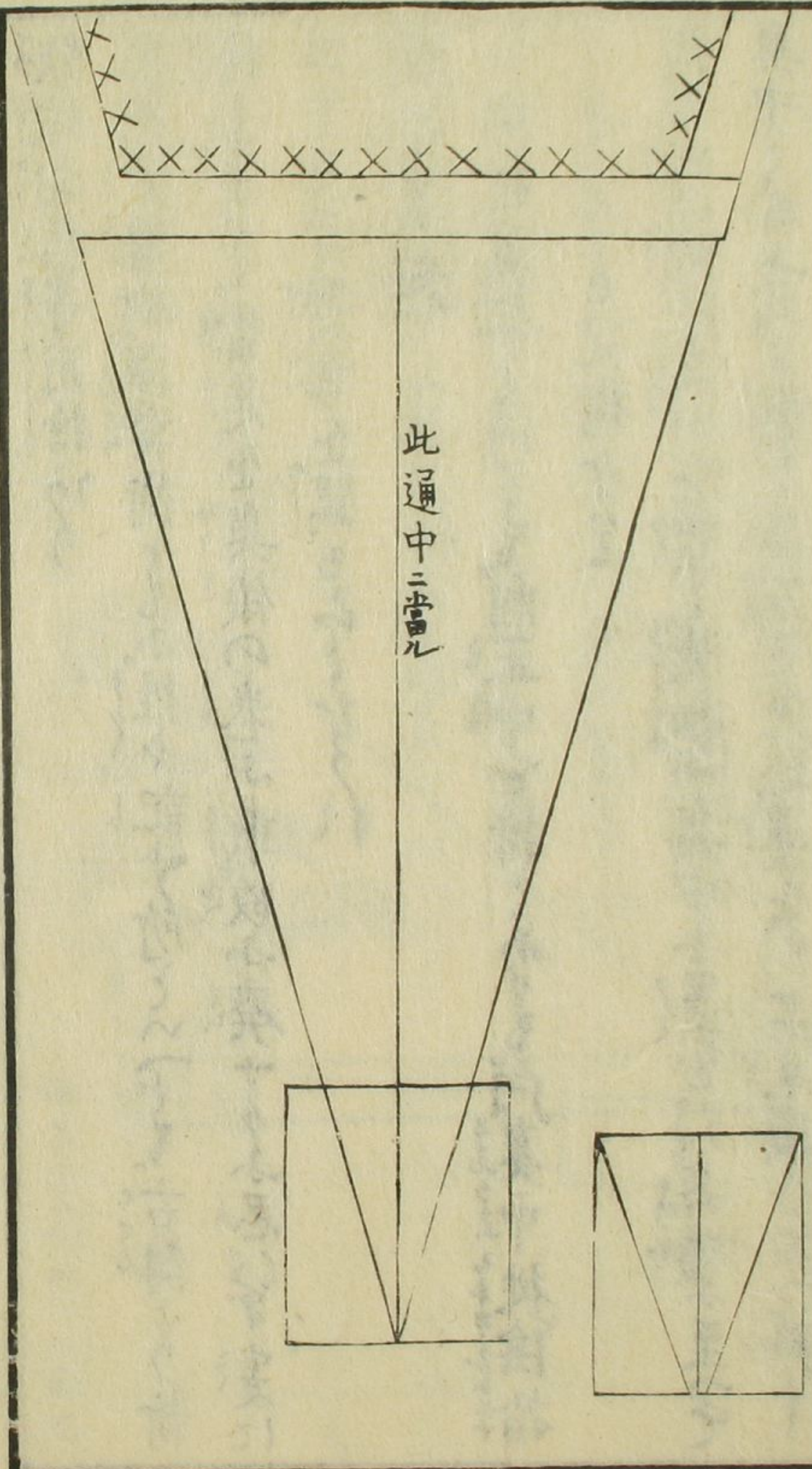
術云向の両の真中と望と先初小真中小墨を引。其場小至つて  
真中と思ふ所。盤を居左を見込墨を引。其尾頭を右へ寫し

是小定木と當て見込。當る処迄。よつて當るなり。扱各當り。成  
得て。中の墨小當る所向の中なり

又云盤の真中と割て墨を引。大圖向の中程空眼と以て。しを



求む。盤を居定木をとりて。或は左の端を見込で墨とて  
其口と右の方へ横め。墨を引。是は定木を當て右の方を見

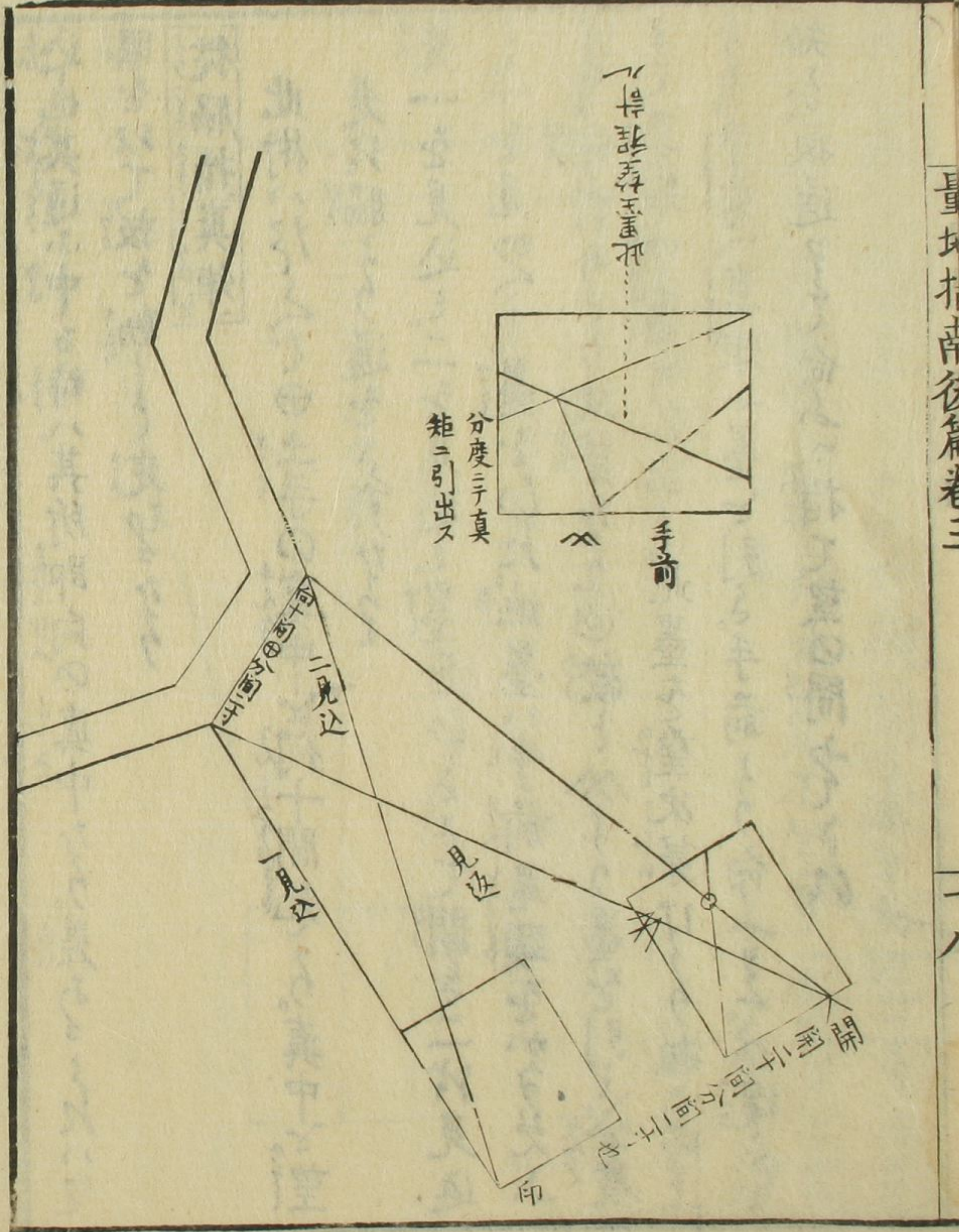


込也。其通ふ中る時ハ其所即向の真中なり。差あるとれハ空  
眼を以て板を動して定むるなり

從脇指真矩

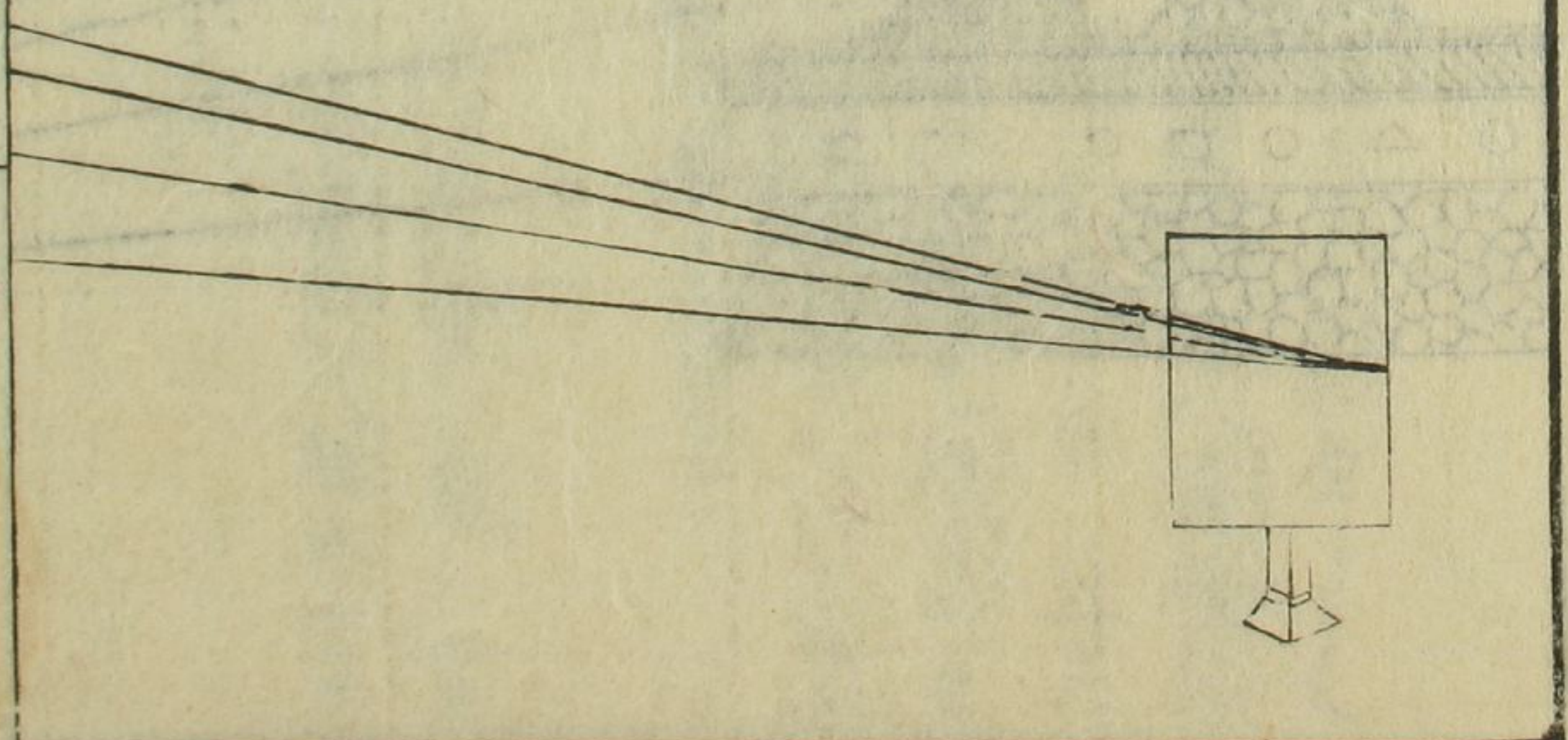
此術ハたゞむ田土手の真中と何十間先より真中と望  
是は脇より通をさすなりと  
先一を見込。二を見込。墨をひき。さて開き二は見込  
一を見込。墨をひき。地墨ハ手前尾頭をかき。小  
く。向ふ。次第なり。◎絞と。分り墨を引。分度  
まで。真矩中墨と引出し。此墨を望次第けり。扱の上  
より。手前へ真矩小墨と引。手前より向ふまでの遠さを  
知。扱通して向ふへ指て望の間めてと





天守櫓知居所

一傳小此術ハ同通小重クソ  
 見ゆる物の其地幅と高下を  
 量知の術也云云  
 昌弘云此術全休前編り所  
 謂山高を知之術と同意也  
 といつても他流秘奥うで條目  
 に掲るが故小學者の惑ひを  
 曉さんぐたり小一圖をなして  
 是を示すと下のおと





△ 天守棟上の高

○ ハ上より三重目屋上の高

× ハ矢倉棟上の高

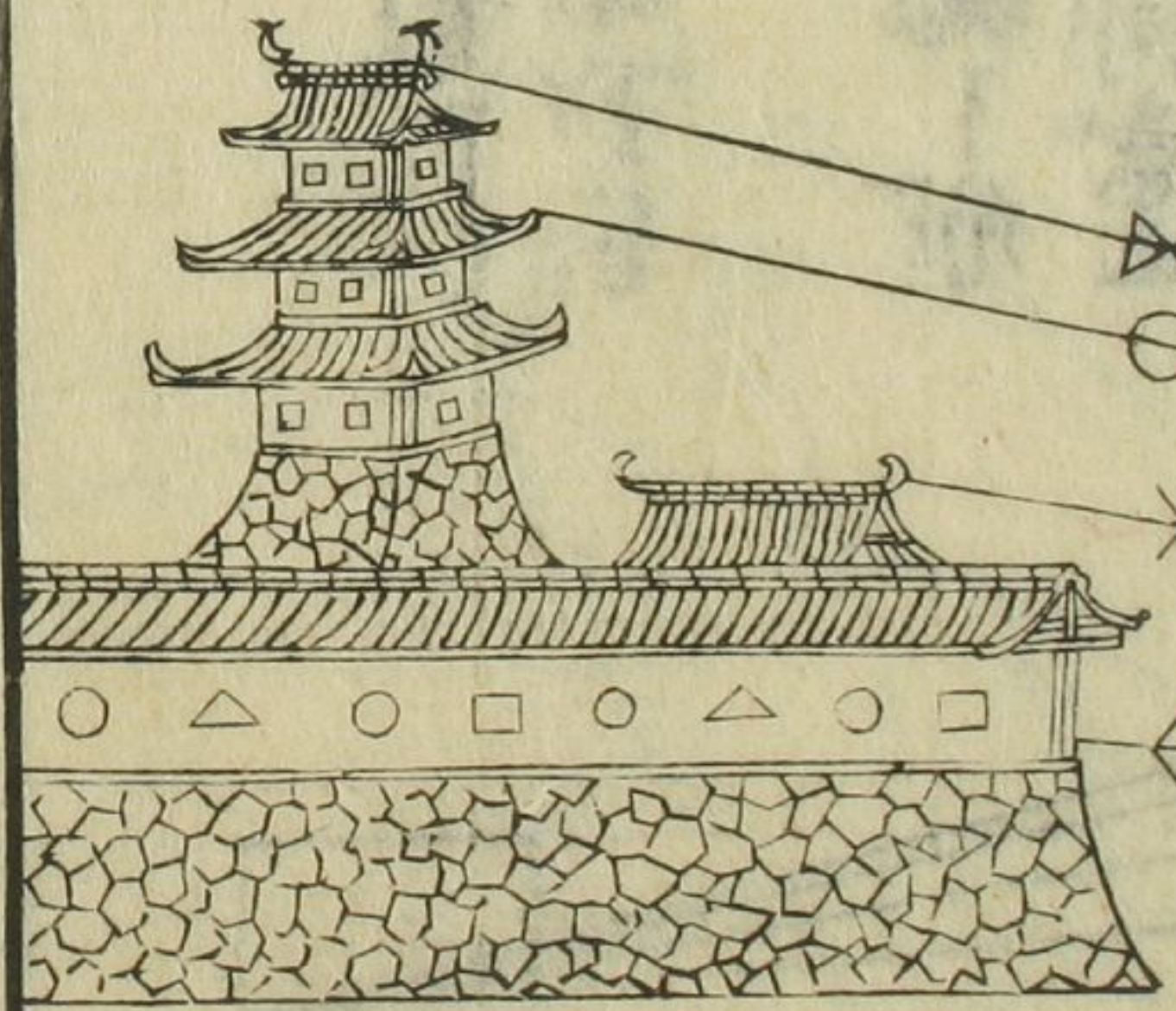
△ ハ土居上場の高

此圖天守なるは

五重なりつゝなまは

煩しき故に法より

て三重と爲



山用表裏

古傳云山の表裏と用るとハ山ハ裏表わつことを知るゝとて  
 解して云。山の表裏ハ人の座するがごとし。人座する時ハ前緩に  
 志て後急なり。故ハ急なる方ハ表裏と緩なる方と前と後。又  
 東西南北ハ山ハ陰陽に配分する理も然りとて。緩急を  
 以て定るや。其國ハ居てハ其國の四方の山と向ふ  
 所皆表といふこと。宜し。何ハ法けても其理あることなり。

横山形

山の形を寫すといハ無益のケ條なり。何時に業と勤るも  
 山の術ハ山の形を寫すといふこと。但山景を圖画する  
 ことハ是ハ輿地術のあづかる所ハあらば

山を責る



山を責るると六国の圖をいふ。大山を小く画けど空虚なりて如何なり。又大く圖すれば國郡小蔓りて外面の妨あり。因て大山ハ分間より小く高く圖するなり。先山の裏と画くもつひ。又雪を顯すともわり

求山之斜登

山の斜登を求ると目あり。是亦無益の條なり。但し遠里の高山かゝと量るハ各別のこゝ。其外通例山と量るハ斜垂と知とせざるはなりとある也。其法ハ條々山谷の術より見ゆ

知山厚

山の厚さしつゝ山の根置地幅のこゝ。小支見渡直之繩真楚の扱をいふ術を以て考べし。故小筆舌を費さば

本傳小云 ○山岳進退 ○知山高 ○進退知高 ○知谷深 ○

知両山之差 ○知谷幅木丈

極傳小云 ○山谷一開 ○知向山前山之差 ○山上谷底知

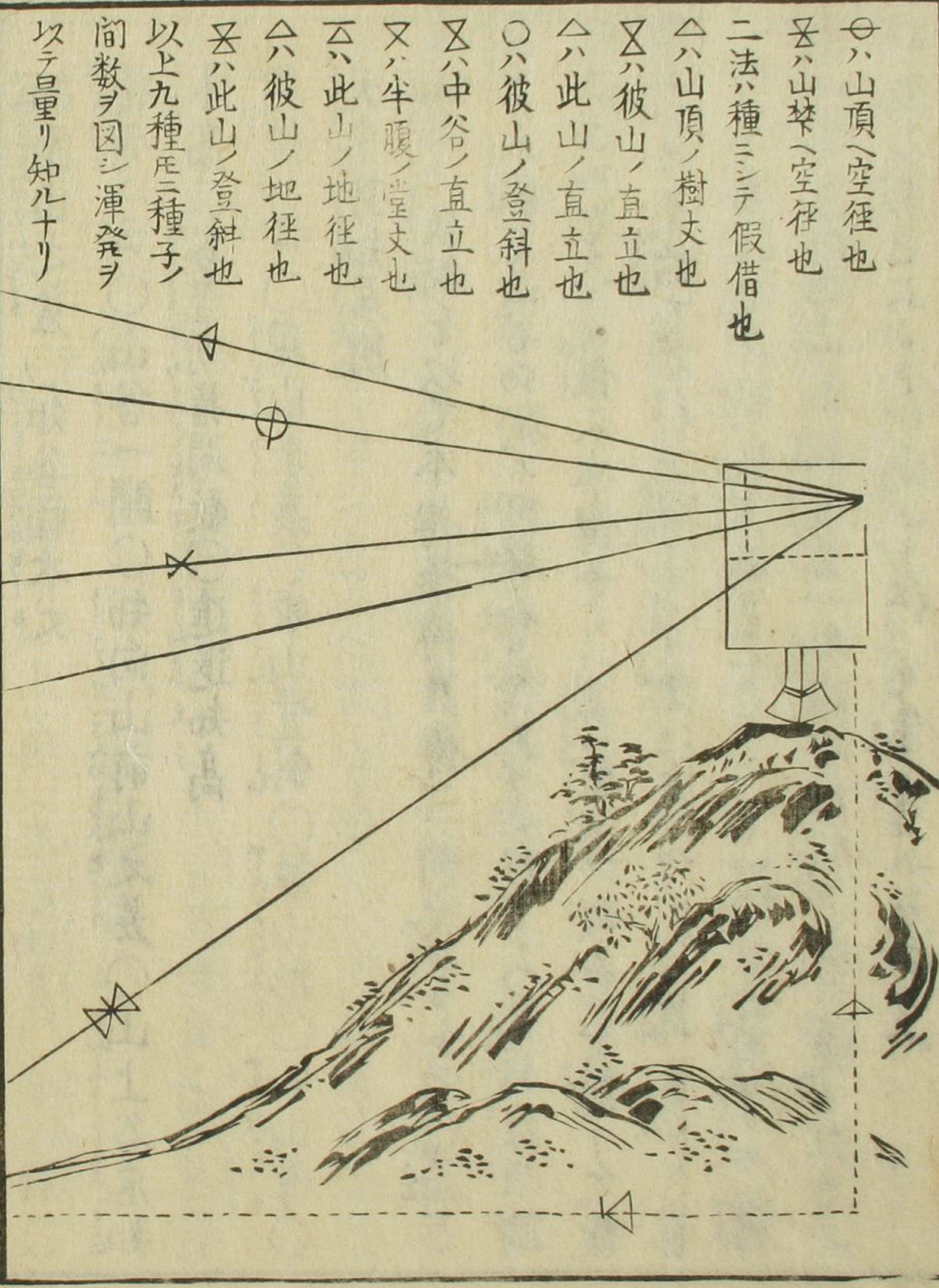
木高 ○谷深所指間数 ○進退知高

異傳小云 ○用山表裏 ○求山登斜 ○換山形 ○知山厚 ○

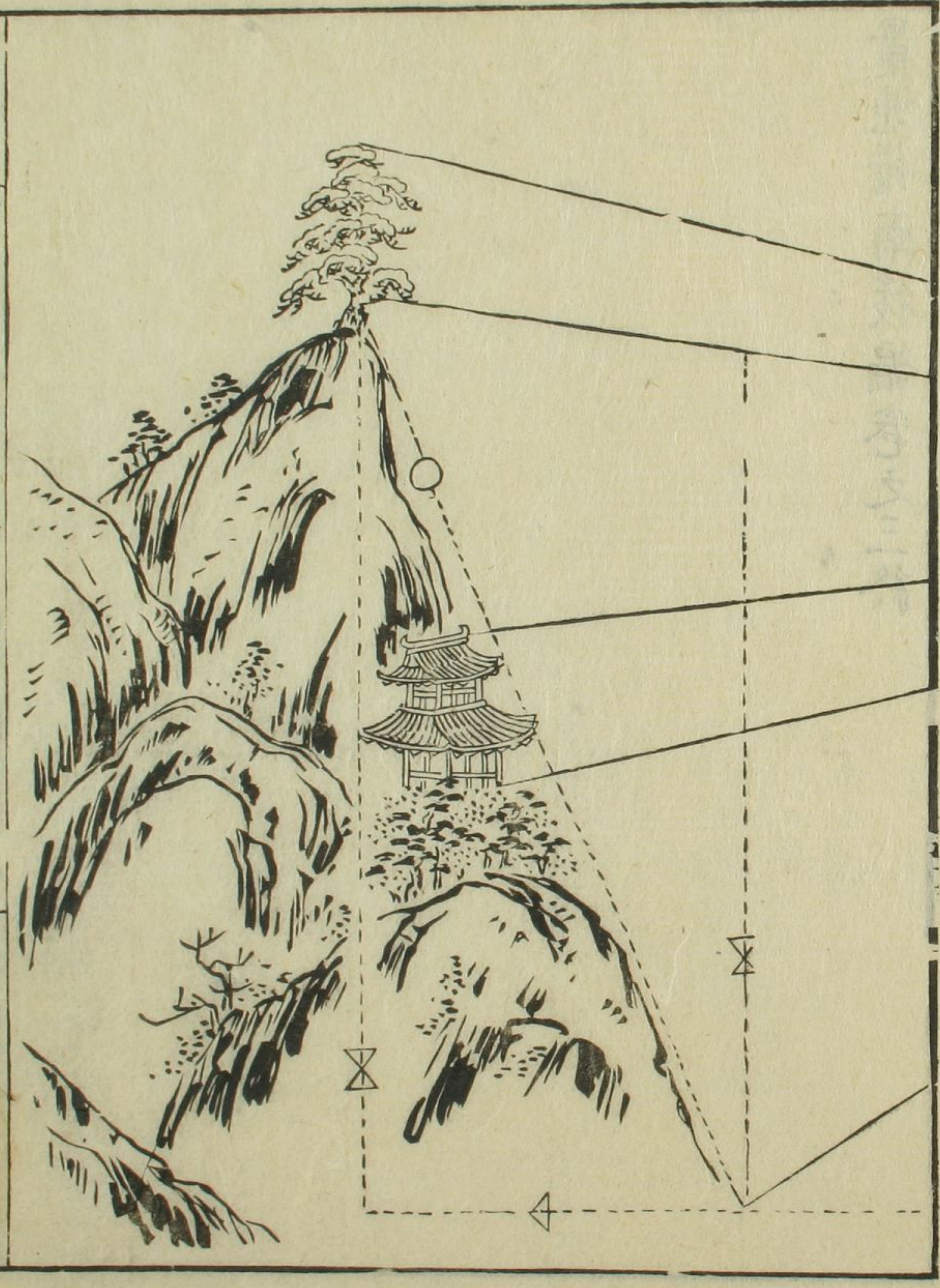
天守櫓知居所

右山谷の數術を以て。本傳極傳異傳三術小分るものハ如何と察する。都て山谷の術ハ初學會得志ぐこれより。再往教諭せんがごめをいふ。但又本傳より其量法の微意を隠して。極傳小おねて。始めてこれを曉し。子弟に高ふらんが為なる。甚しう。右山谷の術數方あるがごとし。といふも。皆予が前編小述る所の山谷數知方一術の中に明なり。是がたり。前編の圖をみれば。是は是は。参考小をいふ





○ハ山頂ノ空徑也  
 ×ハ山脊ノ空徑也  
 二法ハ種ニシテ假借也  
 △ハ山頂ノ樹丈也  
 ×ハ彼山ノ直立也  
 △ハ此山ノ直立也  
 ○ハ彼山ノ登斜也  
 ×ハ中谷ノ直立也  
 ×ハ半腹ノ堂丈也  
 △ハ此山ノ地徑也  
 △ハ彼山ノ地徑也  
 ×ハ此山ノ登斜也  
 以上九種凡三種子  
 間数ヲ図シ渾然ヲ  
 以テ量リ知ルナリ





量地指南後編卷之三終

量地指南後編卷之三

九



